日蓮聖人遺文に見られる「提婆達多」について

――悪知識としての一側面――

原　慎　定

一　はじめに

提婆達多（Devadatta 調達、天授、天熱）は、仏陀釈尊に対する反逆者として有名である。すなわち彼は、釈尊の従弟にあたり、また八万法蔵を暗誦するほどの頭脳明晰な人物でありながら、世俗的利養への強い執着心から釈尊に対して悉く反逆を試み、「五逆罪」の中の「三逆罪」を犯して無間地獄に堕ちた、と伝承されている。ただし、広く仏典中の提婆達多に関する記事を通覧するとき、彼に対する評価は必ずしも一定ではなく、好悪の両面性のあることが知られる。

阿含部及び律部の経典類においては全般的に「逆罪」を犯した者として、その評価は厳しく、悪人の典型として描かれているのであるが、一方、それとは全く対照的に、特に『法華経』提婆達多品では、過去世において彼は今の釈尊の師匠であったという本生譚が開顕され、一転して好意的なイメージをもって受け入れられているのである。

二　遺文に見られる提婆達多

ところで、日蓮聖人の遺文をひもとくとき、提婆達多に関する説示は多く見られ、真蹟現存並びに曽存の遺文に限っても、五十余箇所を数える。しかもその内容を見ると、いわゆる釈尊に対する反逆者、すなわち宗教的悪人の典型として描かれる側面と、一方そのような悪人こそ『法華経』による救済の対象として強調される側面とがあって、好悪両面の評価が並存していることを知る。

そこで今、試みに聖人遺文に見られる提婆達多像を整

理すると、おおむね次の五つのパターンに分類することができる。

(A)逆罪者（釈尊に対する反逆者）

(B)悪知識（邪悪の教えを説いて人を邪見に陥らせる悪徳の智者）

(C)堕獄者（生身のまま無間地獄へ堕ちた者）

(D)過去世における釈尊の師（法華経における天王如来の授記）

(E)法華経によって救済される対象者

まず、(A)の逆罪者とは「五逆の内たる三逆をつぶさにつくる」(1)と述べられるように、釈尊に対する反逆行為の典型である「破和合僧、出仏身血、殺阿羅漢」の「三逆罪」を犯した者として描かれ、特に聖人が提婆達多を、釈尊在世当時における最大の敵対者としてイメージ化されていたことを意味する。

(B)の悪知識については、『顕謗法抄』に「提婆が六万蔵八万蔵を暗じたりしかども、外道の五法を行じて現に無間に堕にき。阿闍世王の父を殺、母を害せんと擬せし、大象を放て仏をうしないたてまつらんとせしも悪師提婆が教なり」(2)と述べられる。すなわち、六万蔵・八万蔵を暗誦するほどの頭脳明晰な人物でありながら邪悪な教えを説き、殊に阿闍世王に邪見を抱かしめた悪徳の智者として描かれるものである。

(C)の堕獄者とは、(A)の逆罪者と関連して、「仏の御身より血を出せし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感ぜり」(3)と述べられるように、聖人は、逆罪者たる提婆達多が無間地獄に堕ちたことを歴史的事実として受けとめられている。

(D)の過去世における釈尊の師とは、『法華経』提婆達多品において、提婆達多は昔、阿私仙人といい、今の釈尊の師であったという本生譚が開顕され、天王如来の記別が授けられる。これに基づいて、聖人は『法華題目抄』に「法華経提婆品にして、教主釈尊の昔の師天王如来と記し給事こそ不思議にはをぼゆれ」(4)と述べられ、『法華経』の有つ三世を貫く救済の世界をもって、提婆達多も肯定的に受け入れられていることを強調される。

最後の(E)の救済される対象者とは、(D)に挙げた『法華経』提婆達多品の説示に基づいて、『開目抄』に「今法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏顕れ、達多悪人成仏の時慈父の成仏顕るれ」(5)と述べられている。つまり聖人は、『法華経』において宗教的悪人の代表者たる提婆達多に成仏の記別が授けられている事実を重要視

され、ここにあらゆる人間存在――ことに末法における悪人、凡夫の成仏が保証されていることを見出されて、『法華経』の救済性を盛んに主張されるのである。

以上、日蓮聖人遺文に見られる提婆達多像を整理してくるとき、ここに興味深い問題が提起されてくる。それは、聖人が、一方ではこの提婆達多を「逆罪」を犯した宗教的悪人の典型で、無間地獄へ堕ちた者として捉えながら、結論的には『法華経』による救済の対象として強調されていることである。そこで次に、このように多面性を有つ提婆達多が、はたして聖人の内面的世界においてどのように統一されていたのか、という問題が提示されてくると思われる。

なおこの問題は、従来の日蓮宗の教学では、いわゆる「悪人成仏」という術語で簡単に処理され、平面的な理解にとどまっているように感じられる。そのことは、聖人が提婆達多の事蹟を描くことによって、いったい何を象徴的に表現しようとされているのか、という問題を、ややもすれば見過ごしてしまうことになるのではないかと考える。

しかし、聖人が提唱された『法華経』による救済の世界を、われわれ末代凡夫の成仏の問題として、より主体的に捉えていこうとするとき、この提婆達多における「罪と救済」というテーマは、きわめて重要視されなければならない。

そこで「罪と救済」という問題意識に基づき、聖人がいかなる意図をもって提婆達多の事蹟を説き示されているのかという観点に立って、いま分類した各パターンについて少しく掘りさげて考察してみたいと思う。なお、(A)の逆罪者としての側面については以前に若干の考察をおこなったので(6)、この小稿では(B)の悪知識としての側面に限定して考察を進めてみよう。

三　提婆達多――悪知識としての側面

「悪知識」とは、「善知識」の対語で、邪悪の教えを説いて人を邪見に陥らせる悪徳の智者を意味する(7)。

まず、聖人遺文の中で提婆達多を悪知識として描かれている部分を求めると、『顕謗法抄』に詳細な叙述が見出される。すなわち、『涅槃経』高貴徳王菩薩品の「菩薩於二悪象等一心無二恐怖一。於二悪知識一生二怖畏心一」という文を中心とする一連の文脈(8)を引いて、「此経文の心は、後世を願はん人は一切の悪縁を恐べし。一切の悪縁よりは悪知識ををそるべしとみえたり」(9)と述べら

れる。そしてその例証として、大荘厳仏の末の四比丘、鴦堀摩羅、善星比丘の事蹟を列挙し、いずれも悪知識に随ったために阿鼻地獄へ堕ちた、と紹介される。その次下には、

提婆が六万蔵八万蔵を暗じたりしかども、外道の五法を行じて現に無間に堕にき。阿闍世王の父を殺、母を害せんと擬せし、大象を放て仏をうしないたてまつらんとせしも悪師提婆が教なり(10)。

とて、提婆達多の悪知識としての側面が明示され、以下、倶伽利・大族王・金耳国王・波瑠璃王・設賞迦王・周の宇文王などの事蹟を挙げて、「此等皆悪師を信じ悪鬼其身に入し故也」(11)と結ばれるのである。

ところで聖人は、上掲の『涅槃経』の「悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ」という文を『守護国家論』(一二二頁)、『唱法華題目抄』(一九四頁)、『立正安国論』(二一三頁)などにも引用され、仏道を求める者の基本姿勢として、堕地獄へ陥れる悪知識の存在を見きわめるよう提示される。その上で善知識の教えに随順することの重要性を盛んに主張されている。なかでも聖人は、この悪知識の代表格として、提婆達多をしばしば取りあげられるのである。

そこで、遺文を拝するとき、悪知識たる提婆達多に師事した人物として、聖人は阿闍世王と倶伽利比丘をしばしば挙げられていることに気づく。

まず阿闍世王については、『顕謗法抄』の説示にも明らかなように、父王(頻婆沙羅)を殺し、母(韋提希)を殺そうとしたこと、及び大象を放って釈尊をなきものにしようと企図したことである。これらの悪逆は、いずれも提婆達多の教唆によるものであり、その結果、現身に悪瘡を生じて非常な苦悩を体験したと伝えられる(12)。また、倶伽利(瞿伽梨などとも音写)は、はじめ釈尊の弟子であったが後に提婆達多に師事し、舎利弗・目連等の所行を誹謗した者として知られ、釈尊の再三の呵責をも聞き入れずに地獄へ堕ちたと伝承される(13)。

つまり聖人は、提婆達多とともにこれら阿闍世王及び倶伽利の名を挙げて、悪知識に随順したために悪道へ堕した者の実例として、遺文の各所に引証されるのである(14)。

ところで、聖人は上述のような「提婆達多=悪知識」という認識以前に、提婆達多が、悪師として影響を及ぼす前段階の問題として、彼が外見上、釈尊と同格視されるほどの智慧を備えた人物であった面に言及されてい

る。『法華題目抄』には、

須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に十八変をならひ、外道の六万蔵・仏の八万蔵を胸にうかべ、五法を行じて殆ど仏よりも尊きけしきなり(15)。

と述べられ、①十八変の神通の体得、②「六万蔵・八万蔵」の暗誦、③「五法」の提唱、という三つの具体的な事蹟が挙げられる。これは、提婆達多が釈尊に匹敵するほどの智慧者としての一面を有していたことを物語るものである。

そこで問題となるのが、これらの外見上は優れた智慧者としての側面が、何故悪知識へと変貌するのか、ということである。つまり、提婆達多は、かかる能力を有ちながら何故仏法の正道から逸脱してしまったのか、という事柄が問われなければならない。そこでこの問題を解明する方法として、上掲の『法華題目抄』の叙述に見られる三つの事蹟を手がかりとして進めることが可能である。

四　十八変の神通体得

まず提婆達多が十八変の神通を体得したという事蹟については、その典拠として『出曜経』利養品が挙げられ(16)、また阿含・律蔵等の諸文献には類似した記事が見られる。そして提婆達多が体得した神通における問題性について、長谷川義浩氏は、「神通は、衆生済度の為の通力であるが、デーヴァダッタの神通は利養の為、我欲の為に用いられている。デーヴァダッタの神通力が利養を因とし、利養のために得たものとする経典が殆んどであるのはその為であろう」(17)と指摘する。つまり、神通体得の典拠として挙げられる『出曜経』利養品の文脈を要約すると、提婆達多は生来、個人的な名聞利養に執着する心が強く、さらに釈尊への嫉妬心から神通の習得を志し、体得した神通によって阿闍世太子を教唆して供養を得た、というものである。

このように見てくると、提婆達多の神通体得の問題は、世俗的な名聞利養への執着心に終始したものであり、仏教本来の神通の使用法から逸脱していたことが確認できる。

五　「六万蔵・八万蔵」の暗誦

次に、提婆達多が「六万蔵・八万蔵」を暗誦したという記事は、遺文では上掲の『法華題目抄』（三九八頁）のほか、『守護国家論』（一二一頁）、『顕謗法抄』（一

六二頁）、『法華題目抄』（三九二頁）、『祈禱抄』（六七四頁）、『三三蔵祈雨事』（一〇七一頁）、『光日房御書』（一一六〇頁）、『断簡五〇』（二四九一頁）などにも見出される。

周知の通り、「八万蔵」とは釈尊一代聖教を指すものである。一方これと連記される「六万蔵」には、「仏法の六万蔵」(18)と「外道の六万蔵」(19)との両義が認められる。このことから、聖人は提婆達多を、当時のインド社会のあらゆる思想・哲学・宗教を熟知した智慧者としてのイメージをもって、慣用的に「六万蔵・八万蔵」と記されたものと思われる。

ところが聖人は、こうした提婆達多の智慧者としての一面を逆説的に捉えられるのである。すなわち『法華題目抄』の前半部分には、

夫仏道に入る根本は信をもて本となす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初也。たとひさとりなけれども信心あらん者は鈍根も正見の者也。たとひさとりあれども信心なき者は誹謗闡提の者也。善星比丘は二百五十戒を持て四禅定を得、十二部経を諳にせし者也。提婆達多は六万八万の宝蔵ををぼへ十八変を現ぜしかども、此等は有解無信の者也。今に阿鼻大城にありと聞く(20)。

と述べられる。つまり、提婆達多は仏法を理解する力を有しながらも高慢な心をもち、仏法を信受する姿勢を欠いていたがために、却って堕地獄の業因をつくってしまったというのである。ここには、聖人が標榜された「信心為本」すなわち釈迦仏・法華経への「信」をもって仏教全体の価値体系を包括しようとする立場が表明され、同時に「無信」の者を謗法者と規定する根拠が提示されてくるのである。

そして、このように「有解無信」の者を謗法者とみなされた聖人は、一方、それとは全く対照的な存在――「無解有信」の者を肯定的に扱われることになる。すなわち、右の『法華題目抄』の次下には、

又鈍根第一の須梨槃特は智慧もなく悟もなし。只一念の信ありて普明如来と成給ふ。(21)

と述べられ、「有解無信」の提婆達多が無間地獄に堕したのに対し、智慧もなく悟りもない須梨槃特が一念の信によって成仏したという事実を、きわめて象徴的に描き出されているのである(22)。

論ずるまでもなく、日蓮聖人の謗法論は、一貫してこの「信・不信」を根本的な問題として捉えるところにそ

の特徴がある。『四信五品抄』には、このことを、「慧又不レ堪以レ信代レ慧。信一字為レ詮。不信一闡提謗法因、信慧因、名字即位也」(23)と端的に述べられているのである。そして、この点を『守護国家論』では、法然上人とその門弟が一切経蔵を安置して法華経を行じているにもかかわらず、「謗法者」と規定されるのは何故か、という設問に対して、

付レ開二経論一弥増二謗法一、例如二善星十二部経・提婆達多六万蔵一。称二智者一由一為下重二自身一扶中悪法上也(24)。

という回答が提示される。これは、まさしく法然上人とその門弟を、善星比丘・提婆達多になぞらえることによって、彼らが「自身」を重んずる高慢さの故に、正法に信順する心を喪失している状態を厳しく批判されるものである。

六　「五法」の提唱

最後に、提婆達多が提唱したとされる「五法」については、田賀龍彦教授によって詳細に研究されている(25)。その「五法」の内容は、上座系諸部派の文献資料において異同が見られるが、「乞食」「不食魚肉」「糞掃衣」「露坐あるいは樹下住」を提唱する点では概ね共通する。提婆達多が「五法」を主張したことは、釈尊の仏道修行とは対照的で、厳格で苦行主義的な要素が認められる。

聖人がこの「五法」に言及されている箇所は、『顕謗法抄』(二六二頁)、『法華題目抄』(三九八頁)、『祈禱抄』(六七四頁)、『法蓮抄』(九三五頁)、『四条金吾殿御返事』(一二五八頁)などである。なかでも『法蓮抄』には詳細な叙述が見られ、

提婆達多を人たとまざりしかば、いかにしてか世間の名誉仏にすぎんとはげみしほどに、とかう(左右)案いだして、仏にすぎて世間にたとまれぬべき事五あり。四分律云、一糞掃衣・二常乞食・三一座食・四常露座・五不レ受二塩及五味一等云云(26)。

と記される。つまり、聖人は、提婆達多がこれらの「五法」を提唱した根本的な理由として、世間の人々から尊敬されたいという名誉欲があったと断定されるのである。同様のことは『祈禱抄』の「名聞利養深かりし人なれば仏の人にもてなされしをそねみて、我身には五法を行じて仏より尊げになし」(27)という説示にも明らかである。この文は、提婆達多が名聞利養への執着心と釈尊に対する嫉妬心とが強く、そのことが「五法」提唱の動

機であったというものである。

この提婆達多の「五法」提唱という行為は、五逆罪の一つに数えられる「破和合僧」の問題と密接にかかわるものである。つまり、提婆達多は「五法」を提唱することによって世間の人々から釈尊と同格視されることを求め、さらには釈尊に代わって新たに教団の統率者とならんとする野心を抱いていたことが窺われるのである。

七　小　結

以上、小論では、日蓮聖人の遺文に見られる提婆達多像の五つのパターンの中、(B)の「悪知識」としての側面を取りあげ、聖人が提婆達多を悪知識とみなされる要素として、十八変の神通体得、「六万蔵・八万蔵」の暗誦、「五法」の提唱、という三つの事蹟を手がかりとして少しく考察を進めてきた。

その一つの結論として、これら三つの事蹟は、外見上は提婆達多の優れた一面を示すものではあるが、実のところ、これらはいずれも世俗的な利養や名誉欲、あるいは嫉妬心などの邪心に根ざすものであり、さらには自己の高慢さの故に、仏法に信順する心を喪失したものであって、本来の仏道のあり方から逸脱するものであることが確認できた。このことは、聖人が提婆達多を悪知識と規定することによって、仏教における邪心や「不信（謗法）」の問題を表象する典型的な人物として描写されていたことと通じるのである。

つまり日蓮聖人は、かかる悪知識の存在を、法華経弘通上の、必然的に興起する敵対者として位置づけられ、その存在を厳しく糾弾されているのである。

このことは、例えば『法華取要抄』に「善導・法然・永観等の提婆達多に誑されて」(28)と、悪知識の代名詞として提婆達多の名を挙げている部分に端的に示されている。また『法蓮抄』に「此国の一切の僧は皆提婆・瞿伽利が魂を移し、国主は阿闍世王・波瑠璃王の化身也」(29)と述べられるように、悪知識の存在は、末法の歴史的現実における不可避的課題として受けとめられた。そして、悪知識が充満したために日本国中の人々が謗法罪におちいっている状況の中で、聖人は、「提婆がやうなる僧国中に充満せば、正法の僧一人あるべし」(30)とて、自己を釈尊の教えを伝道する仏使として、主体的な立場を表明されている。

以上のことから、日蓮聖人が提婆達多を「悪知識」の代表格として遺文中に説示されたことの意味として、次

のことが考えられる。すなわち、聖人は、この悪知識の教唆によってあらゆる人々が無意識のうちに謗法罪を犯してしまうという悲劇的な状況をもって、末法の歴史的現実像を照射し、さらには、かかる状況からの救済の道を、「法華経の行者」としての自己の主体的な生き方に求められたことである。このように見てくるとき、日蓮聖人は提婆達多の悪逆の問題を、末法における謗法者の具体像と密接にかかわるものとして把捉されていることが改めて確認できる。

なお、はじめに分類した提婆達多像のうち、残る(C)(D)(E)については今後の研究課題とし、日蓮聖人の宗教における「罪と救済」の問題をさらに探究するための手がかりとしたい。

註

文中引用の日蓮聖人遺文は、すべて『昭和定本 日蓮聖人遺文』に拠り、（ ）内にその頁数を記した。

(1) 『法華題目抄』（三九九頁）
(2) 『顕謗法抄』（二六二～三頁）
(3) 『神国王御書』（八九一頁）
(4) 『法華題目抄』（三九九～四〇〇頁）
(5) 『開目抄』（五九〇頁）
(6) 拙稿「日蓮聖人の提婆達多観――『逆罪』研究の視点から――」（立正大学大学院『仏教学論集』第一七号）
(7) 中村元著『仏教語大辞典』二〇頁
(8) 『大正新脩大蔵経』（以下『正蔵』と略記）第一二巻四九七頁c
(9) 『顕謗法抄』（二六二頁）
(10) 右同（二六二～三頁）
(11) 右同（二六三頁）
(12) 提婆達多が阿闍世王を教唆したという事蹟については、『十誦律』巻第三六（『正蔵』第二三巻二六〇頁c）、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第一三（『正蔵』第二四巻一六八頁c）などに詳しく伝えられている。
(13) 倶伽利の事蹟については、『大智度論』巻第一（『正蔵』第二五巻六三頁b）、同巻第一三（同一五七頁b）に詳しい。
(14) 『法華題目抄』（三九九頁）、『法華取要抄』（八一二頁）、『瑞相御書』（八七五～六頁）、『法蓮抄』（九四〇・九五六頁）、『妙一尼御前御消息』（一〇〇〇頁）、『頼基陳状』（一三五六頁）、『諫暁八幡抄』（一八四一頁）
(15) 『法華題目抄』（三九八頁）
(16) 『出曜経』利養品には、提婆達多が弟の阿難から神足の道を習い、「在虚空中作十八変涌没自由。身上出火身下

出水。身下出火身上出水。東出西没西出東没。四方皆爾。或分身無数還合為一」（『正蔵』第四巻六八七頁c）とて「十八変」の神通を体得したという記事を伝えている。なお「十八変」とは、仏・菩薩・阿羅漢が示現する諸種の神変をいい、その内容には諸説あることが指摘されている。（『望月仏教大辞典』二三六六～七頁）

(17) 長谷川義浩稿「デーヴァダッタの神通」（『棲神』第三五号）

(18) 「仏法の六万蔵」の典拠としては、『出曜経』巻第一四の「所誦仏経六万。象載不勝」（『正蔵』第四巻六八七頁b）及び『大智度論』巻第一四の「提婆達多、出家学道誦六万法聚」（『正蔵』第二五巻一六四頁c）が挙げられ、このほか『大方便仏報恩経』巻第四（『正蔵』第三巻一四七頁a）、『十住毘婆沙論』巻第十（『正蔵』第二六巻七六頁c）、及び天台大師智顗の『観無量寿仏経疏』（『正蔵』第三七巻一九〇頁a）、『維摩経玄疏』巻第六（『正蔵』第三八巻五五四頁c）などにも同様の記事が見られる。

(19) 「外道の六万蔵」とは『法華題目抄』（三九八頁）と『光日房御書』（一一六〇頁）に明示されるが、『録内啓蒙』に「外道六万蔵ト遊セル本拠追テ之ヲ検スベシ」（第二三巻九丁）とあるように、その典拠は未詳とされている。なお、『開目抄』（五三七頁）にも外道の三仙の所説を指して「六万蔵」と称しており、この問題は、数論派の七十偈を註釈した『金七十論』の中に「此七十偈論摂六万義尽」（『正蔵』第五四巻一二六二頁b）という記事が見られることと関連性があると思われ、更に検討課題としたい。

(20) 『法華題目抄』（三九二頁）

(21) 右同

(22) 提婆達多と須梨槃特とを対照的に扱っている先蹤として、天台大師智顗の『維摩経玄疏』巻第六に、「若尋経失旨事同調達。雖読六万法蔵不免現身堕大地獄。槃特但誦一偈成羅漢道」（『正蔵』第三八巻五五四頁c）という一節が見られる。

(23) 『四信五品抄』（一二九六頁）

(24) 『守護国家論』（一二一頁）

(25) 田賀龍彦稿「提婆達多の五法について」（『日本仏教学会年報』第二九号）ここでは、上座系諸部派の文献資料に記される「五法」の内容的相異を図表をもって明示し、さらに、当時の根本分裂以後の上座部において僧院主義と隠遁主義との抗争があり、提婆達多の「五法」は、隠遁主義の提唱を意味するものであったと指摘されている。

(26) 『法蓮抄』（九三五頁）

(27) 『祈禱抄』（六七四頁）

(28) 『法華取要抄』（八一二頁、原漢文）
(29) 『法蓮抄』（九五六頁）
(30) 『瑞相御書』（八七六頁）